

山極寿一『作られた「物語」を超えて』

本文要約・文章構成・筆者の主張をわかりやすく解説

『作られた「物語」を超えて』の基本情報と本文要約

基本情報

筆者	山極 寿一 人類学者・霊長類学者。ゴリラ研究で知られ、京都大学名誉教授。総合地球環境学研究所所長。
文章の種類	論説（筋道を立てて、筆者の考えや意見を述べる文章）
中心となるテーマ	人間が自分たちの立場や考え方から作り上げる「物語」と、その向こうにある真実を知ろうとする態度
筆者の主張（要旨）	自分勝手な解釈を避け、常識を疑い、相手の立場に自分を置き換えて考えることで、作られた「物語」を超えて真実を知ろうとすることが大切である。

映画や物語などの影響で、「ゴリラ＝胸をたたいて暴れる凶暴な動物」というイメージをもつ人もいるよね。でも、そのイメージは本当にゴリラの姿を正しく表しているのかな？

タイトルの「物語」にかぎ括弧が付いていることに注目しよう。ここでいう「物語」は、おとぎ話という意味ではないよ。人間が、自分たちの立場や考え方から事実を解釈して作り上げた見方や話のことなんだ。そこには、作った側の視点や思い込みが入り込むことがあるんだね。



本文の要約

【ゴリラについて作られた「物語」】

人間は、野生動物の行動を自分たちの立場から解釈して、実際の姿とは異なる「物語」を作ってしまうことがある。ゴリラはその格好の例として取り上げられている。

19世紀の探検家たちは、ゴリラが胸をたたく「ドラミング」という行動を戦いの宣言だと解釈し、ゴリラを凶暴で好戦的な怪物のように捉えた。

こうして作られたゴリラの「物語」は広まり、多くのゴリラが殺されたり、捕らえられて動物園の檻に入れられたりする悲劇にもつながった。

【ドラミングの実際の姿】

ところが、筆者が野生のゴリラを観察すると、ドラミングは単純な「戦いの宣言」ではなかった。自己主張、出発の呼びかけ、不満、遊びへの誘いかけなど、さまざまな場面で使われていた。

【ゴリラから人間社会へ】

ここから筆者は、ゴリラについての具体的な出来事から、人間そのものの性質へと考えを広げていく。

人間は言葉を使うことで知識を受け継ぎ、蓄積し、社会を大きく発展させてきた。一方で、言葉によって体験を脚色したり、誇張したり、実際には見ていないことまで見たかのように語ったりすることもできる。

そうした話が広まると、事実とは異なるイメージや「常識」が作られてしまうことがある。本文では、こうした「物語」が人間どうしの敵対意識を強め、争いや紛争につながる場合があることにも話が広がっていく。



【筆者の主張】

作られた「物語」にとらわれず相手の真実を知るためには、自分勝手な解釈を避け、当たり前だと思っている「常識」を疑い、自分を相手の立場に置き換えて考えてみる必要がある。

動物を理解するには、その動物が暮らしている自然を知る必要がある。同じように、人間を理解するためには、その人々が暮らしている文化や社会を理解することが大切だと筆者は述べている。

【論理の展開】「具体から抽象へ」と文章の構成

『作られた「物語」を超えて』で特に重要なのが、具体から抽象へと考えを広げていく論理の展開だよ。

最初に「ゴリラ」という具体的な例を取り上げ、そこから「人間はどのように『物語』を作るのか」「言葉にはどんな性質があるのか」という、人間に共通する性質や社会全体の問題へと考えを広げているんだ。

「具体」と「抽象」を整理しよう。

「具体」は、ゴリラについて実際に起きた出来事のように、一つ一つははっきりした事例のこと。そこから人間にも共通する性質や、人間社会全体に当てはまる問題を取り出して考えることが「抽象化」なんだよ。

具体から抽象へ考えを広げる 具体 → 抽象 → 主張



具体的な事例から、
人間にも共通する性質や問題を考え、最後に筆者の主張へ進む。



「具体→抽象→主張」の3段階で考える

大きな流れ	内容
具体	ゴリラのドラミングが「戦いの宣言」だと解釈され、凶暴な怪物という「物語」が作られたことと、実際のドラミングの姿。
抽象	人間は言葉によって知識を伝えられる一方、体験を脚色・誇張し、事実とは異なる「物語」を広めてしまうことがあるという性質。
主張	自分勝手な解釈や常識にとらわれず、相手の立場や、その相手を取り巻く環境・文化・社会を理解し、真実を知ろうとすることが大切である。

「序論・本論1・本論2・結論」の4つでも整理しよう

文章の構成を学校の国語で考えるときは、「序論→本論1→本論2→結論」という4つのまとまりを意識することも大切だよ。

構成	役割・内容
序論	ゴリラについて人間が作ってきたイメージを示し、「物語」という問題を提示する。
本論1	ゴリラについて作られた「物語」と、それによって起きた悲劇、さらに野生のゴリラを観察してわかったドラミングの実際の姿を示す。
本論2	ゴリラという具体例から人間に話を広げ、言葉がもつ働きや、人間社会で「物語」が作られる問題について考える。
結論	作られた「物語」を超えて真実を知るために、常識を疑い、相手の立場や文化・社会を理解することの大切さを述べる。

なるほど！「ゴリラの話をしていたはずなのに、急に人間社会の話になった」んじゃないくて、ゴリラの具体例から、人間にも共通する問題を取り出して考えているんだね。

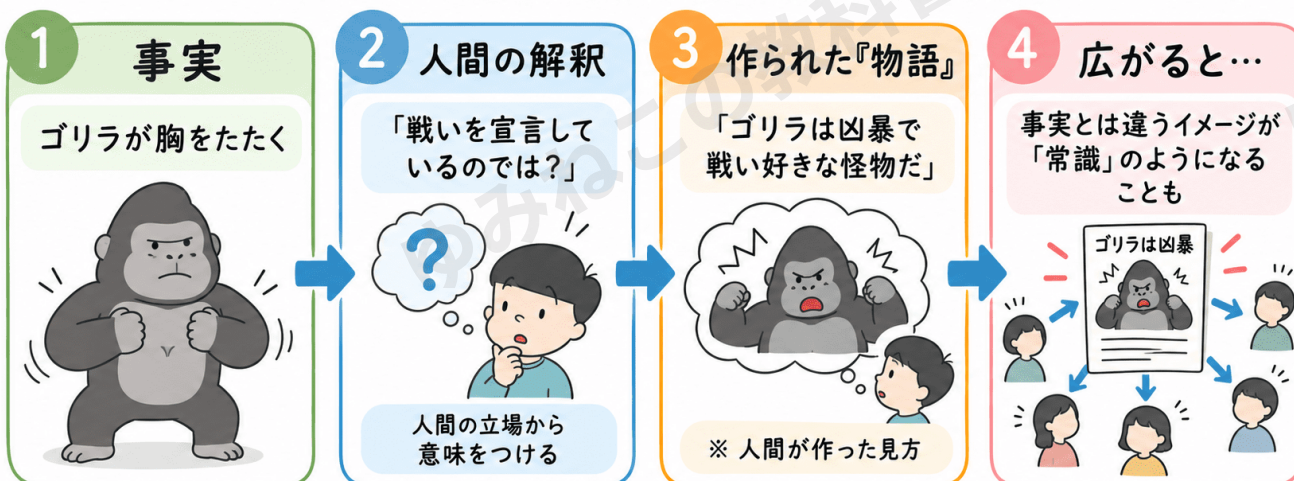


【テスト頻出】ゴリラの「物語」から筆者の主張まで

ここからは、テストで特に問われやすいポイントを、筆者の考えの流れに沿って確認しよう。

1. ゴリラについて、どんな「物語」が作られた？

事実と『物語』は同じではない



『物語』 = 人間が、自分たちの立場や考え方から事実を解釈して作り上げた見方や話

テスト対策ポイント1：ゴリラの「物語」はどうやって作られた？

19世紀の探検家たちが、ゴリラの「ドラミング」という行動を「戦いを宣言している」と解釈したことがきっかけだよ。

その解釈から、ゴリラは「暴力の権化」「戦い好きな怪物」のような存在だという「物語」が作られていった。

ここで大切なのは、「物語」＝最初から完全なうそという意味ではないこと。人間が自分たちの立場や考え方から事実を解釈し、そこに意味づけをして作った見方や話が「物語」なんだ。その解釈が事実から離れると、誤解や思い込みにつながってしまうんだね。



テスト対策ポイント 2：「物語」がもたらした悲劇とは？

ゴリラが凶暴な怪物だと思われたことで、多くのゴリラがハンターの標的となって命を落としたり、子供のゴリラを捕らえるために大人のゴリラが射殺されたり、動物園の頑丈な檻の中に鎖でつながれたりする悲劇が起きた。

2. ドラミングは、本当に「戦いの宣言」だった？

テスト対策ポイント 3：ドラミングの実際の姿は？

筆者が野生のゴリラを観察すると、ドラミングをしても、実際にはめったに戦いにはならないことがわかった。

ドラミングは一つの意味だけを表す行動ではなく、さまざまな場面で使われていたんだ。

- ・相手に負けないことを示す自己主張
- ・出発の呼びかけ
- ・不満を表す
- ・遊びへの誘いかけ

つまり、人間が考えていた「ドラミング＝戦い」という単純なイメージとは違い、ゴリラはドラミングなどの行動を使って、自分の状態や意図を相手に伝えていると考えられるんだ。

ここは「人間の言葉とゴリラのドラミングが同じ」という意味ではないよ。大切なのは、人間が自分たちの物差しだけでゴリラの行動を解釈すると、本当の意味を見誤ることがあるということなんだ。

3. なぜゴリラの話から「言葉」の話になるの？

ここで文章は、ゴリラという具体的な例から、人間に共通する性質という抽象的な問題へ進んでいくよ。



テスト対策ポイント4：言葉がもつ「プラスの働き」と「マイナスの働き」

人間にとって言葉は、とても大きな力をもっている。ここでは、その両面を対比して整理しよう。

言葉の働き	内容
【プラスの働き】	自分が直接体験していないことも他の人から学び、知識を共有・蓄積できる。その結果、新しい技術や工夫が生まれ、人間が飛躍的に発展する道が開かれた。
【マイナスの働き（危険性）】	体験を脚色（＝事実や話に手を加えて、より印象的に伝えること）・誇張したり、実際には見えていないことまで体験したかのように語ったりできる。そのような話が広がることで、事実とは異なるイメージや「常識」が作られてしまうことがある。

言葉は「悪いもの」なんじゃないんだね。知識を伝えて社会を発展させる力がある一方で、事実と違う「物語」を広げてしまう危険もある、ということだね。

4. 作られた「物語」は、人間社会にも影響する

テスト対策ポイント5：人間社会では、どんな問題につながる？

言葉によって作られた話が独り歩きすると、事実とは異なるイメージが「常識」のように受け取られてしまうことがある。

本文では、言葉や文化の異なる民族の間でも、誤解が修復されないまま敵対意識が増幅し、争いや紛争につながるがあると述べられている。

ここは、「民族間の紛争は誤解だけが原因だ」という意味ではないよ。本文では、作られた「物語」や誤解が敵対意識を強め、深刻な対立につながるということが示されているんだ。



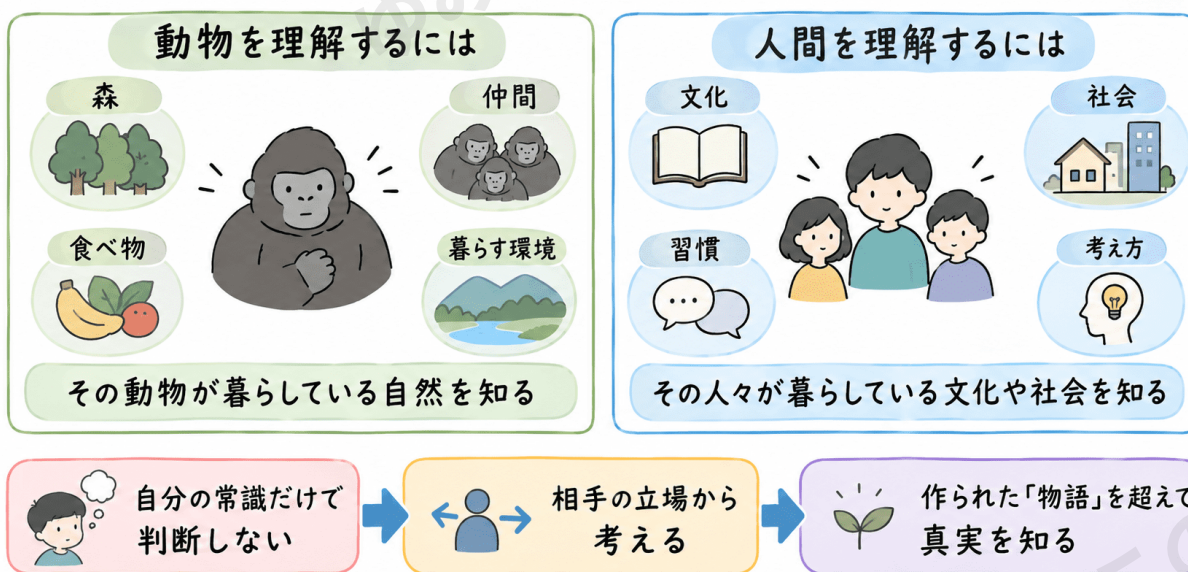
5. 相手の「真実」を知るためには？

テスト対策ポイント 6：相手を理解するために必要なこと

筆者は、相手を正しく理解するためには、相手だけを切り離して見るのではなく、その相手を取り巻いているものまで知る必要があると考えているよ。

理解したい相手	知る必要があるもの
動物	その動物が暮らしている自然
人間	その人々が暮らしている文化や社会

＝ 相手だけでなく、相手を取り巻くものも見る ＝



例えば、知らない国の人々の行動を見て、「自分の常識と違うから変だ」とすぐに決めつけてしまったら、その人を正しく理解することは難しいよね。その人がどんな文化や社会の中で暮らしているのかを知ることで、初めてその行動の意味が見えてくることがあるんだ。



6. 筆者が最も伝えたいことは？

テスト対策ポイント7：筆者の最終的な主張（要旨）は？

【記述問題で使える考え方】

筆者の主張を問われたら、次の内容を押さえて、自分の言葉でまとめられるようにしよう。

- ・ 自分勝手な独りよがりの解釈を避ける。
- ・ 自分が当たり前だと思っている「常識」を疑う。
- ・ 自分を相手の立場に置き換えて考えてみる。
- ・ 相手を取り巻く自然・文化・社会まで理解しようとする。
- ・ 作られた「物語」を超えて、その向こうにある真実を知ろうとする。

字数や「本文中の言葉を使って」などの条件に合わせて、これらを組み合わせて答えよう。

この文章で大切なのは、「人の話を疑おう」ということではないよ。自分が知っている見方だけを絶対だと思わず、相手の立場や背景を知ろうとすることが大切なんだ。タイトルの「作られた『物語』を超えて」は、そこにつながっているんだね。

『作られた「物語」を超えて』重要語句・漢字まとめ

本文に出てくる重要語句の意味を確認しておこう。語句の意味だけではなく、本文の中でどのように使われているかも意識すると覚えやすいよ。

言葉	意味
権化	ある思想や性質が、具体的な形をとって現れたもの。「悪の権化」など。
勇壮（ゆうそう）	勇ましく、力強く立派なこと。
蓄積	たくさんたぐわえること。たまること。
脚色	事実や話に手を加えて、より印象的に伝えるこ



	と。
誇張	実際よりも大げさに表現すること。
増幅	物事の程度や勢いを、さらに大きくすること。 感情や敵対意識などがより強くなること。
格好（かっこう）の例	ちょうどよい、ふさわしい例。
好戦的（こうせんてき）	戦うことを好む様子。
ドラミング	ゴリラが胸を手のひらでたたく行動のこと。
悲惨（ひさん）	見ていられないほど痛ましく、かわいそうな様子。
飛躍的（ひやくてき）	段階を大きく飛び越えるように、急速に進歩・発展する様子。
修復（しゅうふく）	壊れたり悪くなったりしたものを、元の状態に直すこと。
独り歩き（ひとりあるき）	本来の意味や事情から離れて、言葉やうわさなどが勝手に広がっていくこと。
継承（けいしょう）	前の人のものを受け継ぐこと。
しいたげられる	無理におさえつけられ、苦しめられること。
排除	取り除くこと。ある集団などから締め出すこと。
独（ひと）りよがり	他人の意見を十分に考えず、自分だけが正しい・よいと思い込むこと。

本文に出てくる重要な漢字も確認しておこう。読み方や熟語とセットで覚えると、テストでも答えやすくなるよ。

漢字	読み方	使い方・意味など
凶	キョウ	凶暴（きょうぼう）、凶悪（きょうあく）、吉凶（きっきょう）
銃	ジュウ	銃（じゅう）、拳銃（けんじゅう）
壮	ソウ	勇壮（ゆうそう）、壮大（そうだい）、悲壮（ひそう）
惨	サン みじ（め）	悲惨（ひさん）、大惨事（だいさんじ）、惨め（みじめ）
欧	オウ	欧米（おうべい）、西欧（せいおう）
紛	フン まぎ（れる）	紛争、紛失（ふんしつ）、紛れもない



『作られた「物語」を超えて』テスト対策ポイント

『作られた「物語」を超えて』テスト対策ポイントまとめ

- ・この文章は、筋道を立てて筆者の考えを述べる論説である。
- ・文章は、ゴリラについての具体的な事例から、人間に共通する性質や人間社会全体の問題へと抽象化していく形で展開している。
- ・大きな流れは「具体→抽象→筆者の主張」で捉えられる。また、文章構成として「序論→本論1→本論2→結論」という4つのまとまりも意識しよう。
- ・ここでの「物語」とは、単なるおとぎ話ではなく、人間が自分たちの立場や考え方から事実を解釈して作り上げた見方や話のこと。その解釈が事実から離れると、誤解や思い込みにつながることがある。
- ・言葉のプラスの働きは、体験や知識を共有・蓄積し、人間の発展につなげられること。
- ・言葉のマイナスの働き（危険性）は、体験を脚色・誇張したり、見ていないことまで体験したかのように語ったりすることで、事実とは異なるイメージや「常識」が作られてしまうことがあること。
- ・相手を理解するときは、動物ならその動物が暮らしている自然、人間ならその人々が暮らしている文化や社会まで理解することが大切。
- ・筆者の主張（要旨）は、自分勝手な解釈を避け、常識を疑い、自分を相手の立場に置き換えて考え、作られた「物語」を超えてその向こうにある真実を知ろうとすることが大切だ、ということである。

